峯の浦

1 千年以上にわたり、僧侶や苦行者が、峯の浦として知られる山寺の先で瞑想し、修行をしてきました。この自然の歴史的整地は散策路でつながっており、入口は千手院観音堂と山寺霊園にあります。

千手院観音堂は千手観世音菩薩を祀っています。千手院観音は、最上三十三観音第二番札所にあたります。ここを訪れた際は、本殿に入って参拝し、お賽銭を入れることができます。中の壁には、色とりどりのお札が飾られています。参拝者は、お札に願い事を書き、これを各寺の壁にかけていきます。お札の色は参拝者の巡礼回数を表しており、10 回以上の巡礼を意味する金色の絵馬は極めて稀です。

千手院を出て森を少し歩くと、1900 年代初期まで苦行に使用されていた垂水遺跡に着きます。この場所には、水の浸食によって形成された、蜂の巣状の穴がたくさんある巨大な岩壁があります。中には、古峯神社の鳥居と稲荷神社が立っています。空洞の先の崖側には、高くそびえる杉の木の隣に門のある割れ目があり、不動明王が中に安置されています。

散策路をさらに進むと、草木が生い茂っていて通るのがさらに難しくなっていきます。途中で、城岩七岩と呼ばれる大きな 7 つの岩が見えてきます。遠くから眺めると城の様相をなすことから、そう呼ばれています。その岩の上に立つと、周辺の溪谷を見渡すことができます。

城岩七岩の先は、数種類の特徴的な岩々のある広場へ続きます。この場所は、苦行者が儀式に使用していたと考えられています。広場を過ぎたところにある洞窟には、五輪塔がたくさんあります。以前は数をもっとありましたが、多くが長年かけて盗まれたり壊されたりしてしまいました。残っているものの中には、鎌倉時代（1185～1333 年）まで遡るものもあります。

峯の浦の本院跡は、山寺霊園の散策路の入口付近の別の広場にありますが、本院には阿弥陀如来が祀られていました。本院はすでになくなっていますが、遺跡発掘により本院建造物の基礎、14 世紀にまで遡る遺物、縄文時代（紀元前 10,000～300 年）の陶磁器の破片が見つかっています。

散策路の最後の区間は、本院跡から始まり、山寺霊園まで続きます。これがかつての本院までの主な経路で、入り口には 2 基の石碑が立っています。1 つは牛頭天王で、もう 1 つは千手観音の仏の 1 人、神母女天です。山寺は、霊園から歩いてすぐのところにあります。